

京都哲学研究所（KIP）第1回京都会議から学ぶ資産形成の意味とお金のデザインが果たすべき役割について

京都哲学研究所（KIP）主催の第1回京都会議¹に、9/22~9/24の3日間、Practitionerとして参加し、事前に読むように配られた分厚い資料（右下写真）に目を通し、ラウンドテーブルのセッションでは、インドの哲学者アニル・K・グプタさん司会のもと討議に参加させていただきました。

京都会議：<https://k-philosophy.org/ja/kyoto-conference/>

京都哲学研究所：<https://k-philosophy.org/ja/>



今回、私が京都会議に参加させて頂いた経緯は、2021年から4年間、「ひとが投資をするとはどういうことか」（「自己形成としての投資」に関する

¹ <https://k-philosophy.org/ja/kyoto-conference/>

概念分析と価値提案) についての共同研究²でお世話になった、京都大学大学院文学研究科・研究科長出口康夫教授とのご縁によるものです。

KIPは、出口教授と澤田純（NTT会長）、マルクス・ガブリエル（哲学者・ボン大学教授）³のお三方が発起人となり、2023年に設立された研究機関です。

会議では「身体性」が一つのテーマとして取り上げられ、「わたし」である個人には「できること」と「できないこと（できなさ）」があり、「わたし」に「できなさ」がある故に、「わたし」は「われわれ」としての社会にみずからを委ねざるをえないという関係性が両者にあるということが話し合われました。

ところで、投資とは、個人が社会に自分のお金を委ねることであるとも考えることができるので、お金のデザインは、お客さま（わたし）が自分ひとりでは出来ない資産形成を社会（われわれ）に委ねるという行為、すなわち投資において、橋渡しの役割を担っていることになります。

今回の京都会議では、ABCモデル⁴というものが提唱されました。その意味するところは、

A Action: 実践 産業界

² 京大共同研究の White paper は、下記京大の HP に掲載されています。

第二期京大共同研究(2023/4~2025/3)

(J) <https://www.kyoto-u.ac.jp/ja/research-news/2025-03-31-0>

(E) <https://www.kyoto-u.ac.jp/en/research-news/2025-05-20>

第一期京大共同研究(2021/5~2023/3)

(J) <https://www.kyoto-u.ac.jp/ja/research-news/2023-01-30-2>

(E) <https://www.kyoto-u.ac.jp/en/research-news/2023-01-30>

<chrome-extension://efaidnbmnnnibpcajpcglclefindmkaj/https://www.money-design.com/news/filedownload.php?name=fc4c59f96bc20f8427a9939c51aab608.pdf>

³<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%9E%E3%83%AB%E3%82%AF%E3%82%B9%E3%83%BB%E3%82%AC%E3%83%96%E3%83%AA%E3%82%A8%E3%83%AB>

⁴ chrome-extension://efaidnbmnnnibpcajpcglclefindmkaj/https://k-philos.org/wp_kphilos/wp-content/themes/theme/assets/pdf/white_paper_executive_summary_ja.pdf

B Bridge: AとBをつなぐ媒介

C Core: 価値観 アカデミア

ということであり、資産運用会社であるお金のデザインは、上記のうちBの役割を負うものと再認識した次第です。

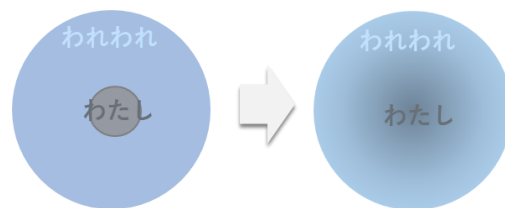
今後とも、このような機会を気づきとして、お金のデザインのビジョンをより明確なものとし、そして実践していきたいと思っております。

ここで、「わたし」「われわれ」というテーマと関連して、個人としての「わたし」にとっての投資の意味について、「われわれ」との関係性の視点から考えてみたいと思います。

「わたし」と「われわれ」とは、物理的には明白な違いがある一方で、たがいに相互依存していることを考えると、両者の間に明確な境界線を引くことはできません。

身近な例でいえば、自分自身を「わたし」と明確に言うことはできても、自分の家族を「わたし」以外のものであるとか、あるいは単純に「われわれ」と言い切ってしまうのは、難しいのではないのでしょうか。家族は「わたし」だけでなく「われわれ/社会」からのサポートも受けています。さらに言う「わたし」も「われわれ/社会」からサポートを受けています。

「わたし」は「われわれ（社会）」と切り離して生きていけない



「わたし」と「われわれ/社会」とが相互依存しているということは、すべてのひと、あるいは「われわれ/社会」は、何らかの「できなさ」を抱えているということを意味しています。ということは、「わたし」と「われわれ/社会」とは、物理的な違いはあるものの、「できなさ」によってたがいに依存することで両者が繋がっているという意味においては、両者の間に境界線を引くことはできないのではな

いでしょうか。

「わたし」にとっての投資の意味は

「わたし」は「われわれ/社会」の一部であると同時に、「われわれ/社会」は「わたし」の一部であるとする、「できなさ」を抱えた「わたし」が、「できなさ」を抱えている個人から構成される集合体である「われわれ/社会」にお金を委ね、投資するということには、どのような意味があるのでしょうか。

ここで大事なのは、「わたし」による「われわれ/社会」への投資は、「わたし」への投資にもなっているということです。つまり、「わたし」の「できなさ」を補う投資をすれば、そのお金は、まわりまわって自分の生活、ひいては自分自身の潜在能力をも引き上げてくれることになります。すなわち、投資とは、お金を通して、自分の「できなさ」を補うために社会/有価証券市場において意思表示をして、社会を自分に引き寄せる行為であるとも言えるのではないのでしょうか。

このように考えることは、些細なことに見えることかもしれませんが、重要な第一歩のような気がしています。それは、民主主義社会における選挙での投票と同様の含意を持つものなのかもしれません。

「われわれ/社会」から個人の投資を見ると、それは「われわれ/社会」の「できなさ」を立て直してくれる行為であるとも言えるのではないのでしょうか。

「わたし」の「できなさ」に着目した投資は、「われわれ/社会」にとっても潜在的ニーズが高いという意味で、その結果、そこから経済的利益が生まれてくる可能性も、大いにあるかもしれません。

さらに、そうであるならば、堅苦しいESG投資にこだわる必要はないのかもしれません。自分の「できなさ」に目を向けた資産形成は、ある意味でMy-ESG投資ともいえるのではないのでしょうか。My-ESG投資は、持続可能な

「わたし」を築くことになり、それは結果的に持続可能な「われわれ/社会」にも貢献することになるのではないかと思います。

資産形成というものを、「わたし」の視点を取り込んだ「われわれ/社会」への投資と考えることによって、数字だけで表現される無味乾燥な金融資産から、愛着の持てる、自分事となった投資・金融資産に、変わってくるのではないのでしょうか。

人生において自分の「できなさ」を克服するには、そのための努力を、一貫性を持って地道に継続することが必要です。そして、自分の「できなさ」に着目した投資も同様ではないかと私は考えます。これを「自己形成のための資産形成」と考えることもできるのではないのでしょうか。

追伸

会議終了後の夕食会だったこともあり、ホッとされていた笑顔でおしゃれな出口教授の表情が印象的でした。

左から福島さん(当社お金のデザインの CIO)、出口教授、廣瀬、大隅さん(私のブログの監修をお願いしている編集者、さいはて社代表)です。

